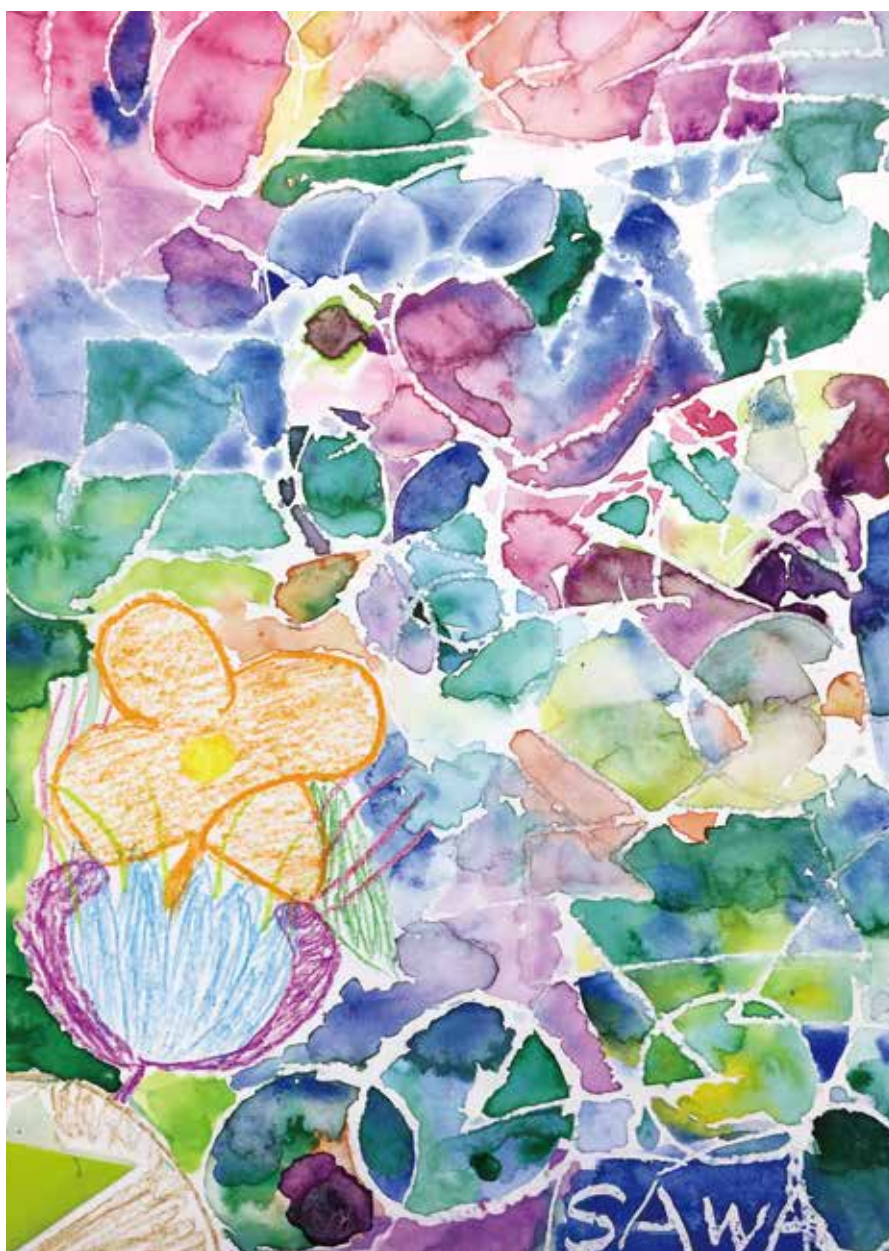


ポローニア

paulownia

vol. **39**

絵:「カラフル」鈴木紗羽(附属小学校2部4年)

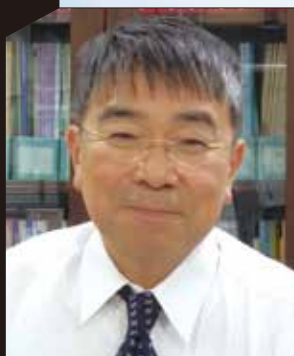
目次

- 2 教育局次長 挨拶**
巻頭言「新たな歴史が始まった」
◆松本末男
平成28年度 筑波大学附属学校教育局主催
公開教員研修会が開催される
◆附属学校教育局学校支援課
- 3 国際バカロレア・**
ディプロマプログラム校認定によせて
◆熊谷優一
発見! ユニバーサル教材
(教材・指導法データベース学習会)
◆田丸秋穂
- 4 タイ研修で学んだ異文化体験**
(「海外で活躍する先輩を訪ねて」)
◆石井裕志
国際理解学習発表会(TIAS交流会)
◆中村 晋
- 5 國立臺南大學附属**
啟聰學校との訪問交流
◆藤本裕美子
第5回 アメリカ短期留学プログラムを
終えて ◆栖原 昂
- 6 歴史を学び、継承する『水田稲作学習』**
◆渡邊隆昌
附属視覚と附属久里浜幼稚部の親子
交流会「お相撲さんとお餅つき」
◆工藤久美
- 7 車いすの生徒たちの校外学習 中学部**
「池袋へ行こう」◆齋藤 豊
自己決定力や合意形成力を育む
「きょうだい遠足」◆由井蘭 健
- 8 第12回「科学の芽」賞募集要項**



新たな歴史が始まった

筑波大学 附属学校教育局 次長 松本末男



SUEO
MATSUMOTO

今年度は、附属学校に1213人の新入生と、教職員64人の新しい方々を迎えた。毎年のことではあるが、3歳児の幼児から高校1年生までの幅広い年齢の新入生が入学してきた。どこの附属学校にも、ちょっと緊張した顔が見られる。しかし、一週間もすると新入生の教室から大きな笑い声や話声が校内に響いてくる。学校が生き生きとフレッシュな空気に包まれる。そして、新しい伝統がそこで生まれる期待がある。

附属学校の最初の行事である入学式は当然ながら各学校でのやり方が違う。そこには各学校の幼児・児童・生徒への願いや学校の伝統と歴史が色濃く反映される。晴れがましい式ではあるが、格式を重んじる学校、幼児を含めた学校なのでふんわりとした学校など、そこにも特徴があって興味深い。各学校では入学式後様々な行事が用意されている。各学校の勉学はもちろんのこと。これらの行事を通して附属の幼児・児童・生徒に育っていく。

新入生には是非とも11の附属学校の交流をしてほしい。自分の学校だけではなく他の筑波大学附属の学校にも目を向けて、筑波大学附属学校群を盛り上げてほしい。2017年度の新たな歴史が始まった。

平成28年度 筑波大学附属学校教育局主催 公開教員研修会が開催される

附属学校教育局学校支援課

2月25日、筑波大学附属学校教育局は、平成28年度附属学校教育局主催公開教員研修会及び附属学校研究発表会を、東京キャンパス文京校舎を会場に開催した。

この研修会は、教職員の幅広い知見を得るための一環として開催し、学内教職員及び学外からの参加も含め約100名の参加があった。

青山学院大学教授の古荘純一先生による「子どもの病的な不安の理解と対応」と題した講演が行われた。

研究発表会は、筑波大学の附属学校及び附属学校教育局における日頃の研究成果を発表し、広く参加者から意見を求めることを目的に開催した。宮本信也附属学校教育局教育長の挨拶の後、附属学校教育局が取り組んでいるプロジェクト研究、グローバル教育及びインクルーシブ教育から5つの研究発表を行った。各附属学校の活動報告としてのポスターセッションも含め、「附属学校の新たな挑戦—筑波大学附属学校群からの発信—」をテー

マに掲げて実施した。附属学校教諭、本学教員をはじめ100名を超える参加があった。



国際バカロレア・ディプロマ プログラム校認定によせて



附属坂戸高等学校 国際バカロレア主任・コーディネーター
熊谷優一

附属坂戸高校は2017年2月13日に国際バカロレア機構より、国際バカロレア・ディプロマ・プログラム校に認定されました。2015年3月に候補校申請を行い、9月には候補校に指定されました。2016年6月に中間審査があり、2017年1月末に最終審査を経て、この度の認定となりました。



国際バカロレア（以下IB）は1960年代にスイスで開発された教育プログラムです。2017年4月の時点で、全世界に約4,800校が認定校になっています。日本国内の一条校でディプロマプログラムを認定されているのは、これまでに本校を含め18校です。

我が国におけるIB導入は、経済界からの強い要請（平成25年6月日本経済連合会の

提言）もあり、2013年にIB認定校を200校に増やすことが閣議決定されました。英語力はもとより、グローバル化に対応した素養・能力を育成するうえで、IBの教育プログラムは優れていると考えられています。

筑波大学は今年度より大学院でIB教員養成プログラムが始まりました。そして坂戸で高校2～3年生を対象としたディプロマ・プログラムを2018年度入学生より導入します。本校ではIBの本格実施に向けて、延べ40人の教員がIBの指導資格を得ています。

IBに関する説明を聞くたびに、とてつもなく壮大な教育プログラムのように思えますが、筑波が総合学科の学校として、そしてSGH指定校としてこれまで行ってきたことは、IBの理念や学習と非常に親和性が高いと各方面から評価されています。IB認定を受けた3日後の2月16日には、IB本部（ジュネーブ）よりシバ・クマ運営理事会事務局長が来校し、その様子がIBのFacebookページで紹介されています。国内から坂戸の教育に注目が集まっています。



発見！ユニバーサル教材（教材・指導法データベース学習会）

特別支援教育研究センター 田丸秋穂

附属特別支援学校5校の指導実践から情報を集め、教材・指導法データベースを作成し、日本語版（約350教材）、英語版（約100教材）を公開しています。データベースの情報をより生かしていくために動画コンテンツの検討を行い、約30教材の動画を加えました。今後も、国内外の特別支援に携わる方々に活用してもらえるよう、情報を更新していきたいと思います。

現在、5附属とセンターで行っている5附属連絡会議において、データベースに公開された教材などを中心に、各附属も会場にして実際の教材展示や教材作成など、各校の持ち味を生かした学習会を行っています。学習会には、5附属の担当者以外にも、多くの附属の教員の参加があり、活発な意見交換をしています。

データベースの活用にあたり、障害は違っても困難さの表れに共通なものがあるという視点を持っています。障害領域によらない教材の活用という観点で実際に紹介された教材を他の附属で活用した例も報告いただきました（写真1）。

写真1：教材アレンジ例



この回の検討では、もとの教材が大変シンプル、アレンジのしやすいユニバーサル教材という特性が話題になりました。3月セミナーでは、初対面の大人どうしも教材を介してなごやかなムードに包まれるという場面もありました（写真2）。本データベースには、さまざまな集団でも活用できる教材のヒントもまだまだあります。

今年度も下記日程で学習会を行います。
5附属を問わず、関心のある先生ご連絡下さい！
snerc@human.tsukuba.ac.jp 担当：田丸



写真2：教材アレンジ例
大人どうしのアイスブレイクにも！平成27年度主催セミナーの「こま」



日 時	会 場
5月18日(木) 16時～	東京キャンパス
6月8日(木) 16時～	視覚
7月13日(木) 16時～	東京キャンパス
9月21日(木) 16時～	東京キャンパス
10月19日(木) 16時～	東京キャンパス
11月9日(木) 16時～	東京キャンパス
1月11日(木) 16時～	久里浜
2月22日(木) 16時～	東京キャンパス

タイ研修で学んだ異文化体験 （「海外で活躍する先輩を訪ねて」）

附属視覚特別支援学校 副校長 石井裕志

昨年、高等部普通科2年の立木勇弥君と1年の横山政輝君が「海外で活躍する先輩を尋ねて」という企画で、本校卒業生で、タイでNGO「アークどこでも本読み隊」を運営し「シチズン・オブ・ザ・イヤー 2016」の受賞者にもなった堀内佳美さんの活動拠点であるチェンマイを訪問しました。12月20日～24日の5日間のプログラムの内容は以下の通りです。

1日目

・ラチャパット大学で学ぶ全盲の学生で、来日経験のあるガンさんとの交流会。

2日目

・タイ北部盲学校（チェンマイ盲学校）での授業見学・スポーツ交流等

立木君は日本における視覚障害スポーツについて、横山君は日本から道具を持ち込み、「触って分かる理科実験」について発表。その他、日本の遊びを披露。

3日目

・タイの少数民族であるモン族の村を訪問し、民族衣装体験、餅つき体験、子どもの踊りを見学。

4日目・5日目

・チェンマイでゾウに乗る体験をした後、バンコクへ移動し、帰途へ。

この体験を通して、二人が感じたことを、それぞれ簡単に紹介します。

「お互いの盲学校の情報を交換することで他国の盲学校との相違点を理解し合うことができました。スポーツを通して、互いにスポーツの楽しさを分かち合い、交流を深めることができましたし、日本の文化についても発信することができました。これらの経験は私にとってかけがえのないものになると思います。（立木勇弥）」

「私はこの研修で、日本と違う文化の美しさを学ぶとともに、モン族もお正月にはお餅を食べるなど日本との繋がりも感じることができました。タイで活躍する先輩に直にお会いすることで、私もいずれは誰かのために貢献できる人になることを目指したいと思います。（横山政輝）」



チェンマイ盲学校での発表（竹とんぼ）

国際理解学習発表会（TIAS交流会）

附属大塚特別支援学校 高等部教諭 中村 晋

3月8日、国際理解学習発表会（TIAS交流会）を行いました。今回の発表会では3つのグループが調べた、日本国内の世界遺産、お祭り、郷土料理、方言、物産品の中から「イチオシ日本」をTIAS留学生に紹介しました。クイズをしたり、踊りを踊ったり、英語を交えながら楽しく紹介する生徒の姿が印象的でした。

交流会では、ガーナ、中国、インドネシア出身の3名の留学生が、グループに一人ずつ入り、アダプテッド・スポーツ（「おにボール」「ドッチビー」）を行いました。アダプテッド・スポーツは子どもや高齢者、また障害のあるないに関わらず、誰でも楽しめるスポーツであることから、言葉の壁がある留学生とでも簡単にルールを理解し、一緒に楽しむことができます。活動を通して、留学生とペアになりボールを転がしたり、追いかけたりしながら一緒に動く心地よさや、勝ち負けの気持ちを共有することができました。



国際理解を題材にした協同学習を通して、生徒の学びの意欲を育て、互いに尊重し合いながら主体的に生活に向かう力を育む授業作りに取り組んできました。この学習では、交流という直接的な体験を通して、実際に外国の方にお会いし、調べたことを伝えるという明確な目的を持つことで、一人一人が学習に向かう姿勢の育ちがみられるようになりました。また、協同学習という方法によって、生徒同士が学ぼう学習機会を設定したことで、協同で目標に向かう姿勢や援助し合ったり、教え合ったりといった協力する姿がみられるようになりました。



國立臺南大學附屬 啟聰學校との訪問交流

附属聴覚特別支援学校 教諭 藤本裕美子



附属聴覚特別支援学校高等部専攻科（造形芸術科・ビジネス情報科）の生徒14名は、2016年12月12日～16日に研修旅行で台湾に行き、2日目の13日に國立臺南大學附屬啟聰學校（以下台南聾学校）を訪問しました。聴覚障害のある同じ年代の友だちに出会うことへの期待に胸を膨らませながら、生徒たちは交流に向かいました。

始めに陳秀雅校長先生からご挨拶をいただき、学校についての説明をうかがいました。通訳を介してお話でしたが、生徒たちは日本と共通する手話をいくつか見つけ、少しずつ緊張がほぐれてきた様子でした。

その後はビーズ細工です。紙に書かれた記号に従って作業を進めます。初めのうちは通訳を介して説明していましたが、だんだんと直接台南聾学校の生徒や先生方に身振り手振りで教わる方が早いと気がつき、最後は「手話通訳はいらないね!」と言う生徒

が出るほど、ことばの壁はあっという間になりました。全員が可愛らしいビーズのアクセ

サリーを完成させるころには、あちこちでメールアドレスやLINEを交換する光景が広がっていました。

次に、日本のお土産をお渡ししました。けん玉や日本の風景が描かれたパズルなど、選んだお土産をパフォーマンス付きで紹介すると、大きな歓声が上がりました。自分の思いが海外の人にダイレクトで伝わったという経験は、生徒たちにとって大きな自信となったようです。

引き続き台南聾学校とは交流学習を行い、共同研究も進めていきます。今回の交流を契機に、より両校にとって実りある活動に発展させていきたいと思います。



第5回 アメリカ短期留学 プログラムを終えて

附属中学校 英語科教諭 栖原 昂



本プログラムでは、第3回よりペンシルバニア州にあるFaith Christian Academyでの授業参加と、近隣家庭でのホームステイを含む、約10日間のプログラムを実施しています。今回は3月18日から28日までの11日間、2、3年生の計36名が参加しました。

学校では、生徒1人1人にambassadorと呼ばれるお世話係のFCA生が終日付き添ってくれ、ambassadorの出る授業全てに本校生徒が参加させてもらえます。日本語が使えず、日本と雰囲気も大きく異なる学校生活に、はじめは彼らも不安そうでしたが、2日目には自分から積極的に質問し、FCA生のグループに自ら参加する姿もたくさん見られるように。最後には本校生徒がどこにいるのかすぐには見つけられないほど学校になじみ、彼らのたくましさや、受け入れ校の丁寧かつ温かい対応に感動を覚えました。

ホストファミリーとの時間も思い出深いものばかりで、日常生活や週末の旅行を通して、学校では体験できないアメリカ文化に触れました。言語の壁を越えた人の温かさ、文化の異なる相手を知り、互いに思いやることのすばらしさを経験し、別れ際に涙する生徒の姿が印象的でした。

本プログラムを通して、生徒は単に英語を使うだけでなく、日本とは異なる文化や習慣、宗教に対する人々の姿勢から多くを学び、同時に日本や自分自身について改めて考えることができました。また、英語力そのもの以上に、英語を使って何かを伝えようとする前向きな姿勢が目立つようになりました。今後も、より多くの生徒が本プログラムに参加し、自身の視野を広げ、新たな挑戦をするきっかけとしてくれればと願っています。



車いすの生徒たちの校外学習 中学部「池袋へ行こう」

附属桐が丘特別支援学校 教諭 齋藤 豊

1月20日(金)、桐が丘特別支援学校中学部の生徒達が、池袋での校外学習、「池袋へ行こう」に参加しました。車いすでの外出には階段を使えない、狭い所を通りにくい等、様々な困難があります。「池袋へ行こう」は、自分たちの力での外出を経験し、自らの行動範囲を広げていくという意味があるのです。また、「池袋へ行こう」には「総合的な学習の時間」での学習のまとめという意味も含まれています。

1年生は道路の傾斜や段差の存在など、身近な環境や、困難に感じる状況が存在する理由等について調べてきました。「池袋へ行こう」では、外出を通じて調査内容の確認や、複数の車いすがある状況での集団行動、飲食



店等の予約などを体験しました。

2年生は、ヘルパーや理学療法士など、普段、お世話になっている

方々の職業に関する苦労や、障害者の就労状況等について調査しました。そして、「池袋へ行こう」では、豊島区役所の障害福祉課と連絡を取り、障害のある方が実際に働いている様子を見学したり、インタビューをしたりしました。また、障害福祉課の方から豊島区在住の障害者に関する就労状況について教えていただきました。



3年生は実社会で車いす利用者が実際に困る場面などを調べ、その際の適切な対応などについて検討を行いました。「池袋へ行こう」ではユニクロと東急ハンズに連絡を取り、車いす利用者に対する対応や設備などについて教えていただきました。



生徒にとって、それぞれの学びの確認や深化につながる良い経験となりました。

自己決定力や合意形成力を育む「きょうだい遠足」

附属小学校 教諭 由井 蘭 健



「きょうだい遠足」とは、異学年ペア(きょうだい)のクラスで行う遠足です。1年生なら6年生、2年生なら4年生、5年生は3年生がそれぞれリードします。

この「きょうだい遠足」の特徴は、リードする学年の子どもが、遠足の行き先や行き方、現地での活動など、ほとんどを企画し、運営するということです。異学年で行う遠足は、決して他校でも珍しいことではありません。しかし、ほとんどすべてを子どもが企画し運営する遠足は他に例を見ないでしょう。

昨年度は11月11日に、狭山稲荷山公園、上野公園、葛西臨海公園、小金井公園、お台場、平和の森公園、所沢航空記念公園、昭和記念公園、羽根木公園がその遠足地に選ばれ、「きょうだい」ともども楽しい一日を過ご



すことができました。

遠足のほとんどを企画し、運営するためには、様々なことを決めたり、様々な問題を解決したりしなければなりません。「きょうだい遠足」は附属小学校の子どもたち一人ひとりの自己決定力や合意形成力を育むための大切な行事だと考えています。





第12回「科学の芽」賞

ふしぎだと思うこと これが**科学の芽**です
よく観察してたしかめ そして考えること これが**科学の茎**です
そうして最後になぞがとける これが**科学の花**です

朝永振一郎
Shigeharu Asanaga

第12回
朝永振一郎記念
「科学の芽」賞
募集!

作品募集
朝永先生の言葉のように自然現象の不思議を発見し、
観察・実験して考えたことをまとめましょう。
素直な疑問・発見があるものを募集します。

募集方法 レポート用紙(A4判)10枚以内
※応募作品は郵送として送付し、写真・手書き・フープの絵画も可(※ただし、
※応募作品は郵送として送付し、写真・手書き・フープの絵画も可(※ただし、

応募資格 小学校3学年～、中学校、高等学校(両海軍中学校を除く)までを含む、
中等教育学校、特別支援学校の職人もしくは生徒
※小学生部門、中学生部門、高校生部門に別けて募集します。

審査方法 筑波大学教員、筑波大学附属学校教員及び後援団体関係者などが審査・選考

審査結果発表 平成29年11月下旬、筑波大学ホームページに掲載
※受賞者および関係者向けです。受賞作品は筑波大学のHPに掲載します。

賞・記念品 「科学の芽」賞の受賞者には学長より賞状と記念品を贈呈
【その他、副賞・奨励賞があります】※応募作品は平成29年度を募集します。

表彰式・見学会 平成29年12月23日(土) 於：筑波大学学生会館

送付先 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1 筑波大学「科学の芽」賞 実行委員会

募集期間 2017 8/20日 ▶ 9/30日

筑波大学
University of Tsukuba

お問い合わせ先
03-3942-6806
筑波大学「科学の芽」賞実行委員会(併合事務局)
E-mail: kagakuonome@un.tsukuba.ac.jp
詳しくは、筑波大学ホームページ(科学の芽)をご覧ください
http://www.tsukuba.ac.jp/community/kagakuonome/index.html

「科学の芽」賞に
輝いた作品展
期間：平成29年12月

2017年度「科学の芽」賞
2016年度「科学の芽」賞
2015年度「科学の芽」賞
2014年度「科学の芽」賞
2013年度「科学の芽」賞

☎ <http://www.tsukuba.ac.jp/community/kagakuonome/index.html>

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.39

発行日……平成29(2017)年5月31日

発行者……附属学校教育局教育長 宮本信也

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙: U-Jlimax [日本製紙]

